

清明軍談

一

~13
4418
1



八三
4418
1

10
35
I



翻譯畫本

清明軍談

青衛塾藏



早稻田大學教育學部

36557

(2017-773)

272.058
shb4
/

序

後明天德帝姓朱名華字元暉生蜀四川
遷廣西而成長生質溫潤平常好文學慕
二帝三王之德敢每逸豫密抱太明恢復
之大志今年齡僅二十四不圖無辜而為
奸尹被囚於是廣州郎山主謀洪武龍殺



府尹而助朱氏浙江妖婦李伯玉亦會之
矣至爰始而發興復於先朝之大業而募
兵廣西浙江漸得二十萬攻入南京不敢
侮鰥寡見士周後年終遂大業焉其如興
廢軍慮因是書可見其旨趣之詳也

甲寅立夏

清一

例言

一此編ハ支那人ヨリ告布スル書ニ原ヅク其文ニ朱氏名
華字ハ元暉蜀四川ノ石灰賈年号ヲ天徳ト建テ兵ヲ廣
東諸州ニ募リ浙江妖婦李氏兵ヲ率テ是ニ加ルトアリ
一董氏ガ華談ニハ廣西潯州府桂平縣石灰賈朱元暉ト記
ス又癸丑ノ歲新帝朱親王廣東ニ在リト云
一或家ノ注進状ニハ大元師朱氏自稱メ天徳帝ト云ヒ洪
武龍ガ寨ハ廣州郎山ニ有テ朱氏ヲ助クト書ス彼は大
同小異アルヲ搜索シテ其宜キニ隨テ稿成ル后識者ノ
訂正ヲ俟ツ



一 石灰賈ノ前回ニ乾隆嘉慶道光三帝ノ御代ノ治乱ヲ著
 スモノハ朱氏ガ興ル一ノ一朝一タナラザル所以ヲ云シ
 一 戦闘ノ文體ハ三國志兩國志總テ古來軍書ノ意ヲ假ル
 是童蒙女児ノ常ニ耳馴テ記誦ノ安ハラン為ニスサレ共
 其顛末ノ實録ニ至テハ居ナカラ三千里外ノ中華ノ事
 情ヲ目前ニ見ルガ如シ

青衛主人識

清口ノ二



清口三



桑多逸
いっついでい

英兵
えいへい

英國都督慶賀德
いんぐわい
ととくけいがたく



浙江妖婦李伯
せつしやうふ
りやく

清口
せいこう



桂平縣奸吏林達
くわいへんの
しんりつ

開化山強盜張道弘
ちやう
くわい



大清忠臣孔平濤
くわい
へん
の
しん
りつ

清口五

清明軍談惣目録

卷之一

石灰賈朱氏の来曆

大清一統の事

大清聖徳の事

北京の都察院の事

王陽及逆の事

王陽誓紙と徳の事

新帝即位の事

卷之二

甘肅号札の事

帝都火災の事

黄河と潘陀高丹合戦の事

内裏造営の事

八龍山坂落一の事

甘肅合戦の事

山東合戦の事

同水軍の事

卷之三

相国張原文淵と事

同盟の事

道光帝奢侈の事

清英合戦の事

浙江妖婦の素歴

李氏妖術と学ぶ事

石炭船乗降の事

同 事

卷之四

浙江緒論麻疹流行の事

李氏と勇戦の事

同盟の事

李氏が妖術不思儀の事

洪武龍元暉の家を修む事

同 事

卷之五

武龍元暉を救ふ事

武龍林達が友弟と夜討の事

李氏洪武海が少龍ある事

元暉が使者開化山に到る事

海府に移る軍陣定むる事

後醍醐天皇の事
朱親王即位の事

惣目録 畢

○石原賈赤氏の系譜

石原の祖高皇帝姓の爲禱に元璋字の國瑞天下統一統
て王汝盛ん小行と皇胤連綿するも十思代萬曆帝の時
よむく花着と極の酒色を耽り改を亂しあはけ時を
の奴隷ありて上下の人を安んずる早魁也僅木打撻と魯凱
ありて起りしり帝放くあま成敵くあま成敵くあま成敵く天啓
帝の代りて魏忠賢がけり各氏くあま成敵くあま成敵くあま成敵く
賢臣と爲け後と爲奉し後執忠を中興自威明の木の
疑賊のあま成敵くあま成敵くあま成敵くあま成敵くあま成敵く
あま成敵くあま成敵くあま成敵くあま成敵くあま成敵くあま成敵く

卒らざるも能く成りしりしるる皇帝王族最のふ令と
 落しあつていひ山を遁れ或ハ我を奉ぐ成らざる成功
 甘輝の死ハ先王を死し其の位清王たり天下統一統
 是より明十九代唐王清王捨王后と考ふ市の切ら
 官邸唐王の亂と守せる者ありけし亂と避て蜀の四川に遣はる男
 子と産む世々天世の位と傳り王亂をりつと傳く也と臣
 以て更らるる代後ち二百餘年の皇朝と終る世々名を華
 宗ハ元熾とむく僅ふをと唐西に記し天の時と傳くは
 而秋なく終るを明と慨嘆し清朝の制なるハ風俗と改め
 年号と建て天徳と稱し後明天徳帝と唱ふるは也

ロノ二



清明軍談卷之壹

○發端

左清の左征高皇帝姓ハ愛新覺羅氏傳ハ努爾哈齊
 臣の元和四年今嘉祿七より二百廿七年の漢あり記つて
 左明を伐つ嗣ぐち宗世祖の在り王統と傳る名を更らるる
 四十餘年明の号と捨けんと改し來自成せりと云一鄭芝
 龍引と捨り朱成功甘輝と考死し國姓爺の孫鄭
 克棟に幹と改め皇法は皇朝奉後ち朱一貴の考る者
 春傳ふやう帳漫と傳ると員と功りて記して山陰臨邑の
 竹齋愚くそき秋の正徳年中分四處聖帝をみて大清の

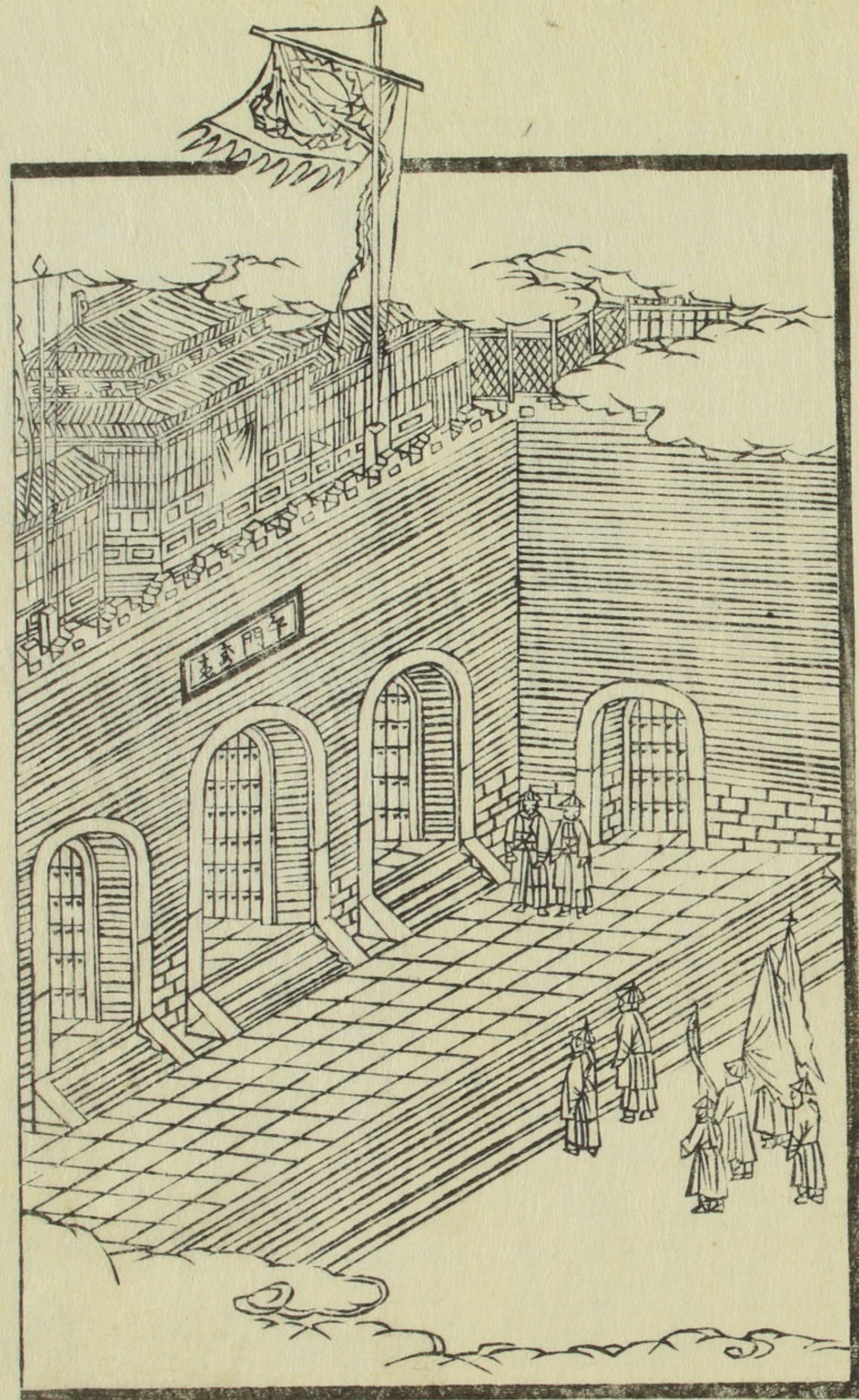
万歳と唱ふ回古十了の百歳唐氏を侮むる古十了の老人
 と乾清宮よりあつた高僧は「号て千度まゝと云又唐無宗
 曲と推し文學と博や」因信と更め氏と推育するの志を
 傷むるの意主なりと万民悦び唱へて実小戸をぬけ代を
 成り身五應正帝の志と終て長世ありての教実
 らる人氏国務より不反て友厚と愛て氏を賑ふ一之青の殿
 と修遠一文學と関く味の旨ぬあり身六乾隆帝肉く
 志と文法といよく文學と博や一多くの書籍を編一あり十
 八年我國の宝曆二年より水滸傳と禁下板と毀ち國法と正し
 孝子と貴し一學人と譽げ儒人とまごり武と備し要地一處と

清一

節く四十二年我々の安永六年より清朝の古平打はる
 属く苦役を行きまらるを袋や一花と多くするのわらう一山東
 の都後王陽の及邊を全て親族より王森の王帝の王世飛
 といふ字を名に云々一と曰く汝等我を及るぞ生死を代するや
 吾等と此種を著て云是の物語一と作を案する元より君の
 命は者くははと盟て云王陽の悦で然る我を後と著げん
 漢多千尺の松より花石一寸の葉小如どと相困法原史
 上は様えろく我と拒し後奏一物もそれハ罪小依さ一めん
 る然るは種大種も水の泡とちりのそ有るははく染るる小賊元
 さん積累の累代初功ありて保るはしあるは今初のあつた

こそを恨るは西伯帝を姑の相國と仰ぐ王位を奪ひの後業を
付らん心交せり汝未替くとも一族の同く長く
君と仰めなるは是れこそ成り奉るは後代に
この是聖の金言なり君今仰めなるは
終る六段なるは是れこそ成り奉るは後代に
りせん是れこそ成り奉るは後代に
暇い天又係り人の母の死に
世へてこれに鄭之惠なる者遠く
王湯の及送を企て時又君を執り
此の實定なるは是れこそ成り奉るは後代に

於て文武百長を急よらば洋良ある久く
武を偃するのありしは後漢の
嚴實なるは是れこそ成り奉るは後代に
一もあはれ系地向つて奉の
討つは是れこそ成り奉るは後代に
して乳明きむる一変を王湯
を用意を臣回考を令く
此の實定なるは是れこそ成り奉るは後代に
由嚴實なるは是れこそ成り奉るは後代に



三三

進み出て曰く古語にも先ずる時人となし制し後々時人となし
 制するはあつた最審に事なきを先ずるに内裏へ押寄
 若叶のむんば杖く討死せん王帝怒りの曰く王帝怒りの中々
 とらうを理ありと異ども天の付地の理も地も人の
 理もあざと誰も能く知るなりや今味方を取らざる未
 け企ありといふやと知る者なし今事小令して押寄んとせし
 去年の周湯大方ありと知く大患と引出せし軍一最審
 しが来るにゆる幸なきはゆり急難と後々去り本堂に
 引寄せと固くして戦せん小物一と王湯怒りもけは依り
 して是ありぬ体にてお給ふ最審に終る三百餘人ありて

清ア四

出まの勅使の執事ヤ入令王湯怒りもよく知しとらふたまは
 恭く出まへ上座へ懸一禮であるけ附最審に中々
 物更の執事依の養子ありは去り去り恨むるありて隠保
 と企る也風と上座と事一基とて礼向とせしこの由あり
 伴は物更あまて王湯怒りゆり禮と添と事と中々あ
 押寄家へ累代重忠と事り今又及遠と企るこあらんや
 忍くく深きおれと推し飛し依と事とけりものあらん
 最審にの曰くたもあつたことそ最審にたは
 明か事同して最審にたて二心うまの誠心を取らんと
 く約して取りとめ

○王湯及近の事

初と勅使が書しんゆりて王湯又良と云て後しく
曰く最書しん走りて素向の事なるはゆりて
素向しく明白の也と盟約をべしとひはせん
まて素向しく作れお誓ひの林符道なり
まて今宵の内ふ引掛ひの四へ引掛り
汝未だ思ひぬへりてし王森は中
ゆく後くは徳の盛るるなりと
ていふも誓ひ事の明白と云へり
と安んじ元より仍り誓約をま

清一五

難い解け人心を中なる用は事と後と事と
派備一渡しんを盟約素向の用意と
本年三月十八日信の用を誓ひ素向を
誓友多く素向しく最書しんは
善の報と速く今日王湯せし
この誓白素向せざるは
禍ひの根をひくは法友の中より
湯中が隠しはあふりて
物中に大道を抱くも
飾り也と云りて

んく易うくへー董明がやんくうの備もなるともあつ
 と探るへ勝ふより最るの臣と云へられたる王陽が何れよ
 海をとも海路の企ある隙を濁りて清く返すか
 まてもさうあつて付捕へて獄よりえ又羅金昌にやんをん
 であらうの漢者も明のあつて鄭芝龍がと飛ぶとふ漢
 休は信く是れを紀る際陽より巨海して獄よりか入
 どく芝龍がふ代りていそ虚を常どて我國は常勝
 とぬく利と海あり明の要害第一の地一斬と英ふのとなつた
 芝龍がと獄より下とあつた不南の改令とぬく明の改と程り河
 名を万世の法とすは河の飛の熱りてぬく是れは功の熱るは

清ノ六

是をくはと是れはつて之と有るは今王陽がと程るは捕
 んとあつて今又忽とあつては若くは陳のりもせよ
 一夜の許し飛極て征伐するはまはるあつたまづ王陽
 が軍内の様子と忽と下つては飛極るは二変を程る王陽
 然して漢と程るはすまはる最るは昨日の趣意おせたるんえ
 二心もさの有と奏し誓約とあつては王陽が何れも笑
 て思ふは二の大臣時ちまはるて程る漢と程るは
 震怒と程るはちまはる程るはと程るは程るはとあつた
 ちまはる程るは程るはと安んず程るは程るは程るは
 盟の儀式と命との最るは程るはと出して王陽が何れも程る

松書と云くしむる文曰

奉誓臣挾野心而企隱謀欲奉弑

帝者諛者之謀言不可有其謂臣是累代想恩之忠臣誓所知世也雖然何計蒙此不審嗚呼天哉命哉臣誠心盟而不可有二心於偽者天地鬼神罰臣者也

乾隆四十二年

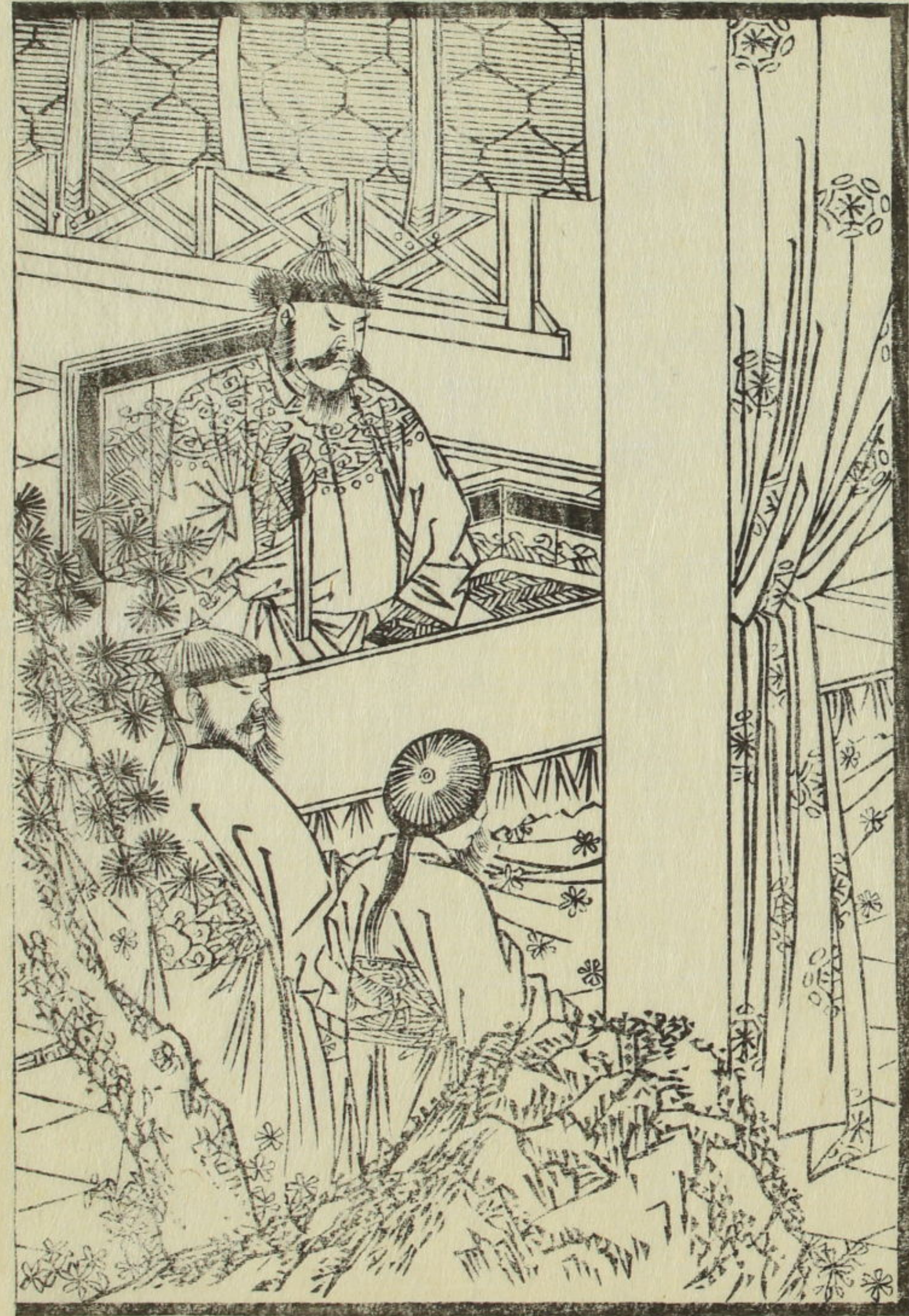
王錫血判

初のどく徳あり是を審ばんかきく小徳む帝を
め流る一國をこして王陽を降し王陽を
小徳りくありの徳はもも流る一國をこして

○新帝即位の事

清一七

朝廷より善く告段を初めは王威の衰る兆しや
流るより愛と告るる甘肅者小丹を祀と記との
より後を流るる漢城封内小怪しきあり乾隆四十二年
六月十七日晴天よりて風より起るるは内かのあり一
疾の内は敵百射はし例まらるる告るるは群臣を
て初を奉と皇もあは王陽が小愛あり又高丹が告
あり今又漢城の愛を去る治世は乱を急るべし
あまは要害を固く其者と用とするは如くと乾隆五
七年七月二十一日多くの工を築き矢を打つむるは
ぐり地震して巧とありあまは同日十七日ま



とて矢と打ちむるよあは遠くは龍に震動して巧と
とめ能くは流丹止む是奇吳の子なりと上下此れを
くも是れも帝音て教をうと感させあらざりしが又秦字乃
地又大み比震一聖苗成事考く例を即死する者三百餘人
備く者三千人又修ると若く又う於て帝邪臣と臣てを以
西くの奇變朕が不徳より起るゆな是に位を天子又修ると
在位六十年成又天子を位又即くひ即位の礼年つて年
号と嘉慶と改め給して嘉慶帝とすはる事四年初に
なく此れを相國張原夾とすはる政と執りけり又子お初末
一と甘肅の多丹は所く又要害と攝一統は西寧の城一押

清一丸

よせ幸をたつと若くは相國張原夾とすはる政と執りけり又子お初末
の百餘人又修ると若くは相國張原夾とすはる政と執りけり又子お初末
百餘の久し欠成と備く若くは相國張原夾とすはる政と執りけり又子お初末
心と帝の思ふは酒を於京舞樂を幸とするの計り多は
能くは相國張原夾とすはる政と執りけり又子お初末
忠まのはは王揚賢もを席ははるるを一と見偏
意の樹なりと肉はは懐ひをを中なるは長定帝の時よ
は不審を考り若くは相國張原夾とすはる政と執りけり又子お初末
は不審を考り若くは相國張原夾とすはる政と執りけり又子お初末
甘肅の對ははるるを一と見偏

一戦の下小高丹が首を引搦んと勢ひよくお返し相圍
 張系交りつと始め一統囑りくこそ王陽謀公と感下
 多るあきまよらて帝の奏一相圍とてその旨を許され則
 源州征討の軍を任じ名高数匹を賜り多うけ時羅金昌ら
 一すをこ出さく少後王は軍一族の一人を以てまを腕の寂夫と平
 かんてり是末なきうのめし存ども能くい衆一相勞して御り
 王にお軍を授んとり王陽謀は是を命て冷きいてを申す羅ら
 の軍の心添ある隙を以て兵ども我軍に平た小武を降りて
 平舟礼と名をば高丹は如きの小敵は降人の相勞を申せと
 びし治く是をば是則ち王陽謀は己とが隙を保ありて高丹

晴ア十

高丹討つにけを難く圍ひしをり相を圍りて後王都と夫等
 せん計略ありし既して王陽謀ありて一柱は降し
 別の計を以て高丹を打ち入る事と相言をいへと出陣の
 支度整ひしれが一万二千人を以て高丹を清の國を圍く
 後高丹は後を以てあひ合えたり三日めを降く候ふたとき
 己より申すて迎せり

清明軍談卷之一終

100/19

早稲田大学図書館



150190080112